シリーズ

西淀川記憶あつめ隊

Vol.2

西淀川には工場が多いですね。どういう職人が住んでいたのでしょうか。今回は鉛工だった荒井さんのお話です。

2011年6月17日
聞き取り

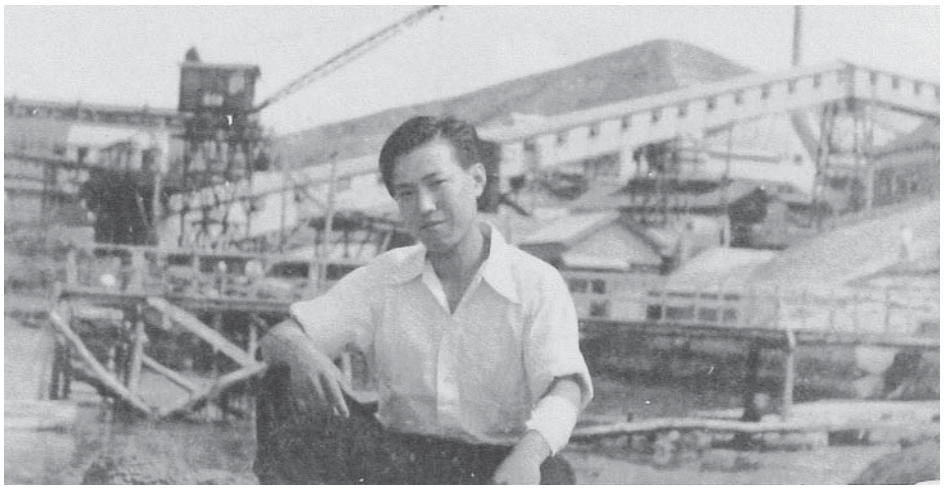
荒井　敏明（としあき）さん

◆直島で特殊技術を学ぶ

荒井敏明さんは香川県高松市の生まれ、大和田在住の82歳です。1945年4月に朝鮮の京城（現：ソウル）に渡ります。朝鮮総督府鉄道局鉄道従事員教習所に入るためです。一緒に暮らしていた祖母に京城に行くことを反対されたそうですが、「どうせ兵隊にとられるなら」という決意をもって15歳の若さで京城に向かいました。しかし、8月の敗戦で帰国を余儀なくされ、11月には引き上げてきます。帰国すると自宅が空襲で焼けてなくなっていました。その後、家のブリキ屋の仕事を手伝いましたが、1946年には直島に渡って三菱鉱業（現：三菱マテリアル）の精錬所に入ります。荒井さんは精錬所の学校で鉛工の技術を学びました。給料は良く、1950年には300円をもって大阪に遊びに来たこともあったそうです。その時の宿泊料は50円だったと荒井さんは覚えていました。

◆鉛工職人として西淀川へ

1953年に三菱をやめて、西淀川にやってきます。三菱の先輩に「おまえは特殊工やからこっちでも仕事があるで」といって呼ばれたそうです。佃3丁目にあった木村鉛工に勤めて、硫酸やチタン、亜酸化銅の貯蔵庫（タンク）の内張りを行ったそうです。これらのタンクには内側に薄く鉛が張ってあり、荒井さんは職人として、各地の工場のプラント建設に携わります。大野にある古河鉱業（現：古河ケミカルズ）の硫酸タンクも荒井さんが手がけたそうです。「四日市の石原産業のタンクも作ったで」という語り口に、日本の高度経済成長を支えた職人の誇りを感じました。荒井さんは鉛だけでなく樹脂の加工も行ったそうです。「世間の要望やからなぁ」と軽くいいますが、両方の加工を行う職人は珍しく、柔軟に器用にこなしたことに感服しました。



直島の三菱精錬所にて。荒井さん18歳のころ

◆第二室戸台風の思い出

1961年9月に第2室戸台風が西淀川に上陸しますが、荒井さんはその3か月前に大和田に移り住みました。第2室戸台風のときは、ちょうど古河鉱業にいたそうで、大野川に黒い水が流れてきて、海から水がくる事が分かったそうです。「1階部分は水没したけど、文化住宅の2階に住んでたから助かったわ」と笑います。

1960年代には公害のことはあまり聞いてなかったそうですが、気管支喘息になり仕事に支障が生じるようになりました。当時は「職業病かな」と思っていたそうです。

「西淀川には職人がようけいたんやで」と語る荒井さんの姿を見て、当時の街の活気が見えたようなヒアリングでした。（林）

みんなもおじいさんやおばあさんに昔の話をきいてみよう。